



No.97

平成26年10月29日

公益社団法人日本山岳会富山支部

## 第14回 五支部合同懇親山行（人形山 1,726）

平成26年9月27日～28日 世界遺産の里・越中五箇山において新日本百名山の「人形山」登山が「五支部合同懇親山行」として行われました。石川支部、岐阜支部、京都・滋賀支部、福井支部から35名の参加があり、富山支部を含めて総勢46名での懇親山行となりました。

五箇山荘での受付準備をする前から多くの皆さんが既に集合されており、もう少し早く受付準備を整えればよかったと思うほどでした。

午後4時10分から、地元南砺市旧城端町の小原耕造さんの講演会が行われました。

「自然に生かされて」と題して、山で出会う機会の多い、生き物の意外な生態の話や蛇の抜け殻等の実物標本等も回覧され、楽しい講演会となりました。参加された皆さんも、身近な生き物の意外な生態に興味があったようです。

しかし、時を同じくして御嶽山の噴火のニュースが頻繁に伝えられ、自然の厳しさ、危険を改めて感じる日となりました。

6時30分からは、山田支部長の挨拶、福井支部宮本前支部長による乾杯の発声で懇親会が始まりました。各支部から戴いたお酒もまわり、話が弾んだ一時を過ごしました。

最後に次期開催県となる石川支部の中川支部長からご挨拶をいただき、富山支部の川田副支部長による1本締めでお開きとなりました。そのあとはゆっくりと温泉に入ったり、二次会で懇親を深めたりと和気藹々で過ごされた事と思います。

明日は、6時30分朝食で7時出発というスケジュールなので、少し早目の就寝となりました。

翌日は、五箇山荘の玄関で全員での記念撮影の後、五箇山観光コースの7名と案内役の河合、有澤の9名を除いた37名の皆さんが人形山目指して元気に出発されました。

（河合義則 記）



五箇山荘玄関前に手参加者全員での記念撮影

## 【人形山偵察山行 2014.9.6～9.7】

人形山が舞台になる五支部合同懇親山行の偵察に出かける。

昨夜降っていた雨も上がり、マルツンボリ山への稜線から朝日が登り、山々に陽光が注ぎ始める。久しぶりに朝から晴れわたり、爽やかな一日の幕開けで、早朝到着した金尾会員と合流して登山口に向かう。周囲の山々の中腹には朝霧が漂う。スギ林の中の登山道を登って行く。オトコエシやジイソブ、シオガマギク、アキギリなどが道端に咲いている。標高 1,208m の広い第一休憩所に到着する。人形山は、青春の頃よく登った山である。第二休憩所 1,380m にあるドウダンツツジの巨木から、職場の山岳会の名前を「どうだん会」と命名した。最後に登ってから、ずいぶんと年月が経っているので登山道の印象が違って見える。第二休憩所からは、ブナの木の間から人形山の穏やかな山容が覗ける。登山道はブナの巨木に出会える道でもある。空は真っ青、辛い登りも癒される。ただ、昨夜の雨で木の根が滑りやすい。ここから宮屋敷跡までは結構長く感じる。ヒキオコシやヤマハツカなど、秋の花が咲いている。ぬかるんだ場所もあり、つづら折りを繰り返すと、樹木の背丈が低くなり岩くずの道になる。

宮屋敷跡からは、鳥居越しに人形山、三ヶ辻山が目の前である。周囲にはミヤマコゴメグサが白花を咲かせ、オオバスノキが暗赤色に紅葉を始めている。八乙女山から袴腰山、猿ヶ山や大門山の峰々が連なる。東側には劔岳や北アルプスの名峰が肩を並べている。見事な展望である。宮屋敷跡からぬかるんだ場所を進むと、ブナとダケカンバの奇木を潜り抜ける。雪と風でこのような姿になったのであろうが、ダケカンバを「踊りカンバ」という意味が理解できる姿である。久しぶりに会いまみえた。長靴を履いてくればよかったと思った。平坦な尾根道沿いには、薄紫色のオヤマリンドウや、ゴゼンタチバナの赤い実がみられる。小さなアツブダウンの道を進むと、今度は左手に岐阜県の山々が望める。少し下って梯子坂の登りである。きつい登りである。三ヶ辻山が美しい姿を見せている。ようやく梯子坂乗越分岐に到着。分岐から人形山へは、急登ではないものの疲れてきた足に堪える。初夏には、稜線にニコウキスゲが黄色の美しい花を見せてくれる。ほどなく人形山山頂である。展望台からは、大笠山や笈ヶ岳、三方岩岳、加賀の白山へと続く雄大な山塊に圧倒される。絶景である。帰路は、草刈りをしながらの下山である。五支部山行では参加者の皆さんが気持ちよく登れるようにと。宮屋敷跡には、会の仲間が憩っていた。故郷の山はいいものだ。(渋谷 茂 記)



人形山偵察山行の宮屋敷にて



中根山荘玄関にて



中根山荘の居間にて

「参加者」山田信明、本郷潤一、渋谷 茂、金尾誠一

※宮屋敷跡まで 近藤 晋、島津常樹、川田邦夫・道子夫妻

## 【人形山頂上往復】

9月28日、前日の小原氏の講演、そして和気あいあいと過ごした懇親会の余韻が残る五箇山荘を各支部毎に乗り合わせて7:15に出発。修復なった中根山荘を過ぎ登山口へ。

1班（京都・滋賀支部、岐阜支部）、2班（福井支部）、3班（石川支部）に各CL、SLを富山支部が努め、8:00人形堂（ひとがたどう）横の登山口を出発。9月初めに富山支部の下見時に草刈を行ったこともあり、軽快な足取りで8:55第一休憩所、



人形山山頂にて昼食をとってくつろぐ



人形山山頂にて 1班



人形山山頂にて 2班



人形山山頂にて 3班

9:35 県内最大といわれるドウダンツツジの巨株がある第二休憩所と小休止をとりつつ、10:10 宮屋敷跡到着。

巨大なダケカンバ（別名踊りカンバ）の下を通り、乗越分岐へ向かう。途中、刈払機で登山道整備にあたる地元の平(たいら)壮年会のメンバーの一人と出会う。左手前方に三ヶ辻山をガスの晴れ間に眺め、梯子坂を登って

11:05、分岐に着く。ここで1班の岐阜支部メンバーのうち3名が分かれて三ヶ辻山へと向かった。紅葉の始まった稜線の登山道を歩き 11:35、頂上に着くも、あいにく曇り空で遠目が効かず、昨日噴火したという御嶽山の噴煙等は当然見えない。全部の登頂班が到着した頃、各班山頂広場で昼食をとり、記念撮影の後、12:15 下山開始。14:55、山崎富美雄さん（中根山荘主人）が駐車場のある登り口で有難い水を用意して出迎えてくれ、無事登山終了となった。

（本郷潤一 記）

## 【人形山の宮屋敷跡班】

我々宮屋敷班は福井支部の宮本、児嶋、志摩、石川支部の津田、埴崎の諸氏と富山支部の近藤、島津の計7名で、頂上班の後からゆるゆる登りだした。1時間ちょっとで第一休憩所へ着き、ゆっくり休憩をとる。曇天で暑くもなく歩きやすい。しかし人形山は雲に隠れその姿は見えなかった。

この辺りまでは頂上班の姿が少し先に見えていたが、宮屋敷跡へ着いた時は相当離されて姿も見えなかった。もっとも我が班の平均年齢は75歳ぐらい、頂上へは行かないと決めているから気楽なものだ。

この辺りが丁度紅葉していて「踊りカンバ」まで散策し、ランチタイムとする。事前の偵察山行の時にはまだ咲いていた「ミヤマコゴメグサ」は影もなかったが、ツバメオモトの実が黒真珠のように輝いていた。

下山の途中、第一休憩所で平（地区）の壮年会の連中が、下から材木を運び上げ、ベンチを設置し終わったところだった。早速初使用をさせてもらう。ここに先月建てられたばかりの木製の標柱がもう熊に齧られていた。何故か熊は木製のものをよく齧る。

ここで下山してきた頂上班と合流し、一緒に下山して合同登山は無事終了した。

（近藤 晋 記）

## 【五箇山観光コースの記録】

人形山山行班を見送り、9名にて出発。五箇山荘を下るとすぐに山崎富美雄さん経営「ヤマトミ企画」のギャラリーに着く。笈ヶ岳・大笠山などの写真がびっしりと展示してあり、山崎さんからの熱弁を聞く。氏の先鋭的活躍がひしひしと伝わってきた。続いて隣接する合掌造りの「村上家」へ移り、家の造りや五箇山の風土、コキリコ節などに聞き入る。

次は世界遺産合掌造り集落の「相倉」を見学。客は世界レベルで、客はアジア系・ヨーロッパ系等多彩な顔ぶれである。気温もぐんぐん上り、冷たいラムネで一服。その後、天に突き出す「天柱石」へ向う。途中で庄川と五箇山村を中心とし、それを包む山々を望める絶好の場所があって、ここに展望台造設の計画があることを熱弁された。天柱石に着いて、なぜここだけに、このような石があるのか、修行者のことと合わせて想像しながら再びヤマトミ企画に帰着。周辺の食堂で昼食を取る。一服後、人形山山行班の登山口、中根平「中根山荘」に向かう。

デコボコ道に揺られて、山荘に着くや否や、山荘の説明やら今後の造成計画やら、年齢に問わず、なんと若々しいのか、小生は少し恥ずかしい気持ちであった。しばらく、心地良い空気を吸い、ここで山崎氏と別れて五箇山荘へ戻り、観光コース班の終了。

<コースタイム>

8:00「五箇山荘」→8:05「ヤマトミ企画」→8:40「村上家」→9:30「相倉集落」→  
11:30「天柱石」→12:25～13:15 昼食→13:55「中根山荘」→15:00「五箇山荘」

（有澤辰彦 記）

## 【山崎富美雄さんのこと】

南砺市上梨（旧平村）在住。長年にわたりヤマトミ企画観光サービス、五箇山保勝会事務局長の立場で五箇山地域の山々の紹介や登山道の開設・整備などに従事してこられた。また人形山の登山口に当たる中根平（昭和50年代まで水田や桑畑として利用）に中根山荘を自力で建設。近年は病気で体力が落ちたものの、情熱は若い時と変わらない。一等三角点研究会会員であり、『富山の百山』では城端山岳会会員として人形山・三ヶ辻山を担当。

今回の五支部懇親山行では、土曜日に岐阜支部会員4名、山田と共にマルツンボリ山を案内して、頂上を目指したが、時間切れで念願の山頂標柱を頂上に建てることは叶わなかった。夜の懇親会にも出席いただき、翌日は観光コースで中根山荘などを紹介いただいたほか、人形山から下山してくる参加者に登山口で美味しい水を用意して待っていて下さった。なお記念品として参加者に配ったのは山崎さん考案の特製手拭いでした。

（山田信明 記）

## 第 30 回 全国支部懇談会に参加して

平成 26 年 10 月 18～19 日の日程で、埼玉県秩父市において「第 30 回全国支部懇談会」が開催されました。富山支部からは、山田支部長、川田副支部長、渋谷副支部長と河合事務局長の 4 名が参加しました。全国 26 支部から 208 名の参加を得て、盛会裡に行われました。

開会の挨拶のあと、埼玉県警山岳救助隊副隊長の飯田雅彦氏と「秩父まるごとジオパーク推進協議会」の吉田健一氏の講演があり、わかりやすい内容と軽妙な語り口に好感が持てました。

埼玉支部の皆さんの運営への心配りに感心しながら、懇親会へとプログラムは進行していきました。森会長や尾上前会長も出席されており、200 名を超える懇親会は圧巻でした。

フォルクローレの演奏や、地元秩父屋台ばやしやの勇壮なバチさばきなどのアトラクションもあり、和やかな雰囲気でした。

翌日は、日本 100 名山の一つである両神山(1,723m)コースと 200 名山の武甲山(1,304m)、琴平丘陵コースに分かれての山行です。富山支部は、両神山コースを希望しましたが、定員オーバーということで武甲山コースとなりました。両神山コースはアクセスのバス代や入山料に相当する費用を含めて 3,000 円の負担があるとのことでした。武甲山コースは下山後の秩父鉄道浦山口駅から解散場所の西武秩父駅間の電車運賃 220 円のみでの負担でした。

私たちの登った武甲山は石灰岩の山で、明治時代よりセメント用の石灰岩の採掘が今も行われており、全国でも珍しい露天掘りの鉱山です。麓には秩父セメント等のセメント工場が多くあります。

その採掘のため、山の標高が 20m ほど低くなったと言われています。

私たちは、総勢 68 名が 5 班に分かれて生川(うぶかわ)登山口の一の鳥居からスタートしました。頂上まで、一丁目から五十二丁目までの石標があり、それを確認しながら 2 時間 30 分から 3 時間の間で頂上に到着しました。途中、登山道は杉の植林帯が続いて単調な感じがしますが、頂上からの眺望は秩父市全域が見渡せ、左に両神山も見ることができ、傑出した景観という感じがしました。

晴天に恵まれて気持ちのよい山行を経験することができました。

帰路は別ルートの秩父鉄道浦山口駅まで、3 時間弱の行程でした。急な下り坂が続き、逆コースからの登山は遠慮したいというのが、素直な感想です。

お世話下さった埼玉支部の皆様方には、素晴らしい企画、運営に頭が下がる思いでした。

どうもありがとうございました。

(河合 義則 記)



武甲山山頂にて

## 私のかかわった山岳遭難 その1

### 黒部五郎岳の遭難

佐伯郁夫

「山岳 2014 年」に湯口康雄さんの追悼を載せると富山支部に連絡があり、山田支部長に指名されてやむなく私が書くことになった。その文中に彼は昭和 27 年の豪雨災害の復旧工事のアルバイトをしていたと書いた。実は私も、近くの早月川の氾濫で堤防が決壊したので、その復旧工事の現場でトレーニングを兼ねて石運びの土方をしていた。

魚津高校の夏山合宿は劔沢キャンプ場と三ノ窓で岩壁登攀を目的とし7月中旬から1週間であり、その後の8月下旬に穂高岳涸沢での合宿が予定されていた。8月上旬からお盆までのブランクの間、穂高合宿の費用を稼ぐため土木作業をしていたのである。

いざ実施という段になって参加者は、3年生の私と2年生1名の2名だけになってしまった。不参加の理由は7月の合宿で小遣いをはたいてしまい金の都合がつかないのがほとんどであったが、私は工事場で得た金があり有難かった。

#### 昭和 27 年白骨を発見

涸沢合宿は中止とし、穂高岳から立山への縦走ということで実行することにした。初日は国鉄の高山駅からバスを使って上高地に入って小梨平にテントを張る。

2日目は美しい樹林帯を登って、やがて重太郎新道から前穂高岳に登る。この頃からガスが湧いて視界がなく、今日のようにコースが整備されていなく吊尾根への分岐が分からず、リングワンデリングをやってしまう。私たちと同様に横浜山岳会5名の人達も迷っていた。6人用の大きなテントを持参していたので、この人達も私たちのテントに入れてビバークすることにした。持参したオニギリを分けあってわびしい夕食にする。それでも当時は米が統制の時代であり、都会の人達は白いご飯に感激していた。

3日目は快晴で吊尾根の道はすぐに見つかり、わけなく奥穂高岳の山頂に立った。北アルプス南部の大展望を楽しみ、涸沢岳、北穂高岳を越え、滝谷の迫力ある岩壁群を眺め大キレットを越える。前夜は眠れなかったので中岳で水の得られるところでビバークする。

第4日目は槍ヶ岳頂上に立ち、重い荷を背負っていたが快調なペースで西鎌尾根を下り双六小屋に入る。小屋は無人であったが囲炉裏にはかすかな火種が残っていたので薪を追加して遅い昼食をする。三俣蓮華岳までは登山道が明瞭であったが、そこから北は五色ヶ原まで営業小屋もなく、戦中から戦後にかけて道の手入れをする人もないので、胸まで没する深いハイマツのヤブ漕ぎであった。黒部五郎小屋は潰れ、屋根だけが残っていた。そこに潜り込んで夜を過ごす。

明るく日は小雨に濃いガスの中を出発する。黒部五郎岳の山頂を越え、下りになったところで中俣乗越への分岐点を通り越して北東に延びる尾根を下ってしまう。藪をかき分けて進むが道は見つからないので、もう一度頂上まで引き返すことにして登っている時、岩の間に白骨化した人の骨を発見する。気味悪かったが人物を特定するものを探したところ、キラリと光る直径6センチほどの大きな懐中時計があった。それを持ち帰ることにする。山頂近くまで戻って登山道を発見。その日は太郎平に泊まる。第6日は薬師岳を越え五色ヶ原に泊まり、第7日目に立山温泉を経て粟巣野駅に出て帰宅する。

時計は魚津警察署に届けたところ、1か月後くらいに身元が判明した。その持ち主は第四高等学

校（現、金沢大学）山岳部員で1940年（昭和15年）7月猪谷から歩いて大多和経由で有峰に入り行方不明となっていた金沢市の野田震郎とわかった。

### 昭和28年は悪天候、事故が相次ぐ

金沢の野田家から遺骨を是非回収してほしいとの要請を受けていた。しかし、私が卒業した直後に、魚津高校は増築工事の現場から失火し校舎が全焼してしまった。そこで全校生徒は夏休みの前半は焼け跡の整理に駆り出され、山岳部の夏山合宿は盆過ぎになり、遺骨の回収はその後に行うことにした。

この年は山の天候が悪かった。8月19日、越中沢岳で大阪府立池田高校山岳部OB3名が落雷の直撃を受け1名死亡2名重傷という事故があり、もう1件、金沢市の桜ヶ丘高校OBの榎野和明（19歳）も単独行で五色ヶ原を出発し黒部五郎岳付近で行方不明ということであった。私たちは8月23日に剣沢を発ったが、13号台風にたたられ、黒部五郎岳へ向かうことはできなかった。

### 昭和29年白骨収容。同じ場所で別の遭難者発見。

前年行方不明となった桜ヶ丘高校OBの榎野さんの家族からも捜索の依頼を受ける。7月19日、常願寺川砂防の軌道に便乗をお願いして、真川を経て岩井谷を登り、太郎平経由で黒部五郎岳へ向かった。そして、肩から東側に延びる尾根を下っていくと、ほどなくテントに覆われた榎野さんの遺体を発見した。

その後、野田さんの遺骨を白木の箱に納める。肩に戻って、下から背負ってきた墓標を立てセメントで固める。この墓標は銅板で巻いてあり、碑文は書道の大家・大平山濤氏（当時魚津高校教師、後に日展評議員）が書いたものを、同行の山岳部S君がポンチで念入りに打ち出したものである。持ち帰った遺骨は野田さんの両親に渡した。榎野さんの遺体は後に桜ヶ丘高校の人たちによって現地で茶毘に付された。私たちは金沢の野田家、榎野家から感謝された。なお、この件は、当時の富山新聞と北国新聞で大きく報道されている。

### 墓標は今も道標

中俣乗越へ下る分岐点は見落としやすいところで、うっかり直進して北東尾根へ入った登山者が途中で気づいて戻るの、迷い道の方が立派に見えるくらいである。五十嶋博文氏は「遭難碑のあるところで荷物をおろして山頂を往復しろ」と教えているとのこと。今も道標として役に立っているようである。

これが私の関わった最初の遭難事故であり、その後多くの事故処理に関わることになる。

（つづく）

- ※ 当時山岳部のテントは合宿用の大きなものしかなかった。綿布の重いものであった。
- ※ 米の統制 米は自由に買うことはできなく、配給制度で一人1日いくらと決められていた。ごく少ないのでヤミ米が横行し、見つかりと罰金などの処罰を受けた。
- ※ 登山の食料は生米、生野菜、干魚、缶詰といったもので、長い調理時間を要した。
- ※ 当時は携帯ラジオなどない時代で、山で天気予報を入手する手段はなかった。
- ※ 越中沢岳にある遭難碑は2002年7月、50回忌を迎えて当時の落雷事故の仲間によって立て替えられ今日に至っている。
- ※ 黒部五郎岳の肩に私たちが立てた墓標は太郎平小屋と黒部五郎小舎によって半世紀以上守られ今も立っている。

## モンゴル見聞記

鍛冶哲郎

「6月の草原はいいですよ」、「百花繚乱」、「猛禽類がすごい」という言葉につられて初めてのモンゴルに行ってきた。結果はその通り、いや、それ以上でした。

モンゴルといえば、ジンギスカン。満蒙開拓団は私の親の世代、そして今は、白鵬、朝青龍か。日本の4倍の国土に家畜が5000万頭、人口290万人のうち120万人以上が首都のウランバートルに住んでいる。開高 健によれば「世界で最も人の希薄な国」である。

3000年前にはすでに遊牧が行われていた形跡があり、歴史に登場するのは、BC3世紀に秦を悩ませ、万里の長城を築かせしめたフン（匈奴）からである。13世紀にジンギスカンが作ったモンゴル帝国は、最盛期には、朝鮮半島、インドシナから東欧までユーラシア大陸のほとんどを配下に治め、元寇として日本にも攻めてきたことはご承知のとおりである。その後は、中国（清）、そして1924年から旧ソ連の属国となり、ソ連の解体を機に1992年には資本主義国家となった。今も、ジンギスカンはモンゴル最大の英雄であり、大モンゴル帝国は人々の誇りである。バイカルやウルムチといったモンゴル語の地名は国境を越えて広く分布し、モンゴル人の数は、国内より国外に住むほうが多いといわれている。地形は概して平坦、ウランバートルは1,300m以上の高地にあり、国内で一番低い場所でも500m以上、西には4,000mを超えるアルタイ山脈がある。気候は南へ行くほど乾燥しており、シベリアのタイガからステップ、乾燥ステップ、そして中国につながるゴビ砂漠となる。水系は大きく3つに分かれ、一つは、国境を越えてバイカル湖に至り、エニセイ川を経て北極海に注ぐもので、ウランバートルはこの流域にある。2番目は、ロシアと中国の国境をなすアムール川を経て太平洋に至る。3番目は、ゴビ砂漠で消えてしまう何本もの流れで、国の南半分はこの水系になっている。

今回は、ウランバートルを拠点に、東部の草原地帯（アムール川流域）と北西部の山・森林・草原からなる地方（バイカル湖流域）へ、それぞれ5日間の旅をした。現地での宿泊は、遊牧民のゲルに3泊、ケビンに3泊、ローカルホテルに2泊した。風呂・シャワーはあきらめていたし、野外で用を足すことに何の抵抗もない国柄だから、ゲルの生活に不便はなく、停電や断水で使えない施設があるローカルホテルより、私にはストレスが少なかった。ヨーロッパ人が狩猟に来るといふ辺地のケビンには、貯めた水を使うシャワーがあり、混雑する北アルプスの山小屋よりよほど快適である。



牛と馬

モンゴル高原はまさしく新緑と花の季節で、高山植物を踏まないで歩くのは困難。天気は晴朗、午後から夜にかけて時々雨が降った。雨は家畜の餌である草の成長を促すから、雨の日に来る客は喜ばれるということで、どこへ行っても歓迎された。

旅の足は日本製のオフロード車で、その安定した走行は頼もしく、痛快だった。何せ、道路地図に里程とともに記載されている主要道ですら、草原の中に轍があるだけのものが多い。ウランバー

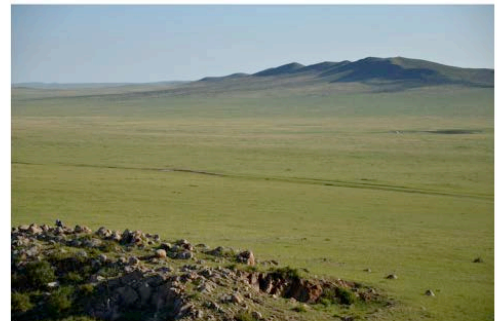


トルから東へ 300 kmにあるウンドルハンという地方都市に、ノモンハン事件の戦勝記念公園があったのには驚いた。二台の戦車と「1939 年、わが勇猛なるモンゴル軍は、ソ連軍と協力して、当地に侵入してきた日本軍をやっつけた」と書いてある（らしい）大きな記念碑が並んである。どうして日本はこんなところまで攻めて来たのかと聞かれたが、元寇の末裔にそんなことを言われてもねえ。司馬遼太郎にならえば、「侵略者も 19 世紀以前の概念なら英雄」なのだ。

今回の旅行で一番の印象は、遊牧民の暮らしであり、家畜の扱いである。彼らの生活ぶりに、人間本来の野生と知性、知恵と技を見る思いがした。半野生馬を捕まえるときの荒業には、そのスピードとパワーに圧倒され、度胸と決断に恐れ入った。あれをみると、モンゴル人力士の強さが納得できるし、その昔、数において勝るヨーロッパの軍勢がジンギスカンに駆逐されたのもわかるような気がする。小さなナイフと素手で羊を屠り、解体する鮮やかな手際も一見に値する。まず、ナイフで腹の皮を少し切り裂き、そこから腹腔に手を入れたと思ったら、あっという間に羊は昇天してしまった。その間、羊は暴れることもなく、悲鳴すら上げない。指で大動脈を一気にちぎるのだそうだ。彼らは、このやり方が羊に最も苦痛を与えないと自負しており、まさしく神業である。ちなみに、モンゴルで家畜といえば、馬、牛、羊、ヤギ、ラクダの 5 種に限られる。豚と鶏は餌やりや、移動させるのに人手がかかり、肉以外に利用価値が少ないとの理由で家畜とは認めていない。遊牧民の主食は、肉と乳、及びその加工品である。餃子やピロシキ、水団などの類で小麦も食べるが、あくまでおかずである。草原にはノビルやハーブといった肉に合う野草が手短にあるのに、なぜか彼らはこれらの植物をあまり食べない。スパイスの文化もない。どの食べ物も薄塩で素材そのものの味がおいしいが、醤油と酢があればさらによし。



草原のエーデルワイス



茫茫千里

ウランバートルには 3 日間滞在し、街歩きと博物館見物をした。モンゴル語は日本語に近いから覚えやすいというが、キリル文字には難儀する。店は正札主義だから、値切り交渉の煩わしさが無い。大相撲の影響

もあって、人々の対日感情は大変良いということである。そのせいではないだろうけど、モンゴルは、日本の国連常任理事国入りを支持する数少ない国の一つなのだ。

モンゴルは長らく旧ソビエト連邦の配下にあったこともあり、近くて遠い国と思い込んでいたが、今回行って考えが変わった。自宅でゆっくり朝食をとり、昼の便で富山を發たてば、インチョン乗り換えでその日のうちにウランバートルに着く。30 日以内ならビザはいらない。富山空港に無料で車を置いておけるのもいい。ただ富山-インチョン便は往復とも閑散としていたのが気になった。

蛇足ながら、そのインチョン空港で予期せぬ収穫があったので紹介する。当初は韓国に出国するつもりはなかったが、6 時間の待ち時間を利用してソウルの土を踏んでやろうと欲張ったのが結果オーライ。空港の地下鉄案内所で、「斯く斯く然々、ソウルまで特急往復」といったら、案内嬢が「あなたの持ち時間でソウル往復は無謀です、空港内でも買い物はできますよ」と切符を売ってくれない。「わが目的はグッチやヘネシーに非ず、ソウルの土を踏みたいのだ」と下手な英語でやり取りをしていたら、隣の案内嬢が「お気持ちはわかりますが」と流暢な日本語で同じことをおっし

やる。日本語なら負けない。自己責任で行くのだからと迫ったが、麗しき案内嬢は動ぜず、「トランジット客専用の無料ツアーはいかがでしょう、今なら 15 時発のインチョン市内観光に間に合うから、それにしなさい」と半ば命令である。観念して教えられた集合場所に行った。パスポートと乗り換えを証明する航空券を見せ、保険代 3 ドルを添えて申し込めば OK。なんと、「無料ツアー」は、大型観光バスに英語のガイド嬢付なのだ。私の他には、インド、ドイツ、中国、アメリカの総勢 9 人。空港を出て間もなく渡るインチョン大橋（長さ 22 km、国内最長、世界 7 番目）など沿線は韓国の経済成長を象徴している。ガイドさんに引き連れられた俄かグループはすぐに打ち解けて愉快である。旧跡と市場を見た。市場の入り口では、各人にコインが 3 枚渡された。市場内だけで通用するコインは、昔の穴あき貨幣を模したもので 1 枚が 1 ドル、計 3 ドルの買い物ができるという。無料ツアーに小遣いまでもらって、キツネにつままれたような気分である。試に餅菓子を買ったら、ウォンでおつりが来た。インチョン空港のラウンジは、韓国文化の紹介コーナー、仮眠ができる待合所、シャワー、WiFi などがエコノミー客にも開放されていて、これがハブ空港なのかと大いに好感を持ち、韓国の勢いを実感するというおまけつきの旅となった。

次は、行きがけの駄賃にソウルで焼き肉を食べるのもいいだろうし、北京からモスクワ行きの国際列車で国境を超えるとか、シベリア鉄道でバイカル湖まで行き、イルクーツクから帰るのも面白そうだ。富山とモンゴルは近いのです。ぜひ行きましょう。（鍛冶哲郎 記）

## 立山黒部ジオパークが日本ジオパークに認定

「38 億年×高低差 4,000m！ 体感しようダイナミックな時空の物語」ということをキャッチフレーズに「立山黒部ジオパーク」を県内に広めようとする運動が展開されてきたが今年度、日本ジオパークの認定を受けることになりました。「立山黒部ジオパーク推進協議会」が設立されて 1 年にならないスピード認定でした。それだけに推進関係者の努力は大変だったと思います。日本には既に 33 ヶ所が認定されており、審査も次第に厳しくなっている現状です。

私の認識では、県内東部にある博物館や科学館等の学芸員達が中心になって、富山県内には未だ認識の弱いジオパークの必要性を説き始めたと考えています。まずは組織作りから始まり、小生も最初の組織とも言える集会に参加してからこの活動に協力し始めました。立山黒部を中心とした地域の素晴らしい自然環境を地形の創造から考えて、研究・教育、保護・保全はもちろん、地域振興に役立てようというのがテーマとなっており、このことに関心があったからです。県内ナチュラルリストの方々



や日本山岳会富山支部の方達の顔も数人見られました。昨年 12 月 9 日には株式会社インテックの最高顧問である中尾哲雄氏を代表とした「立山黒部ジオパーク推進協議会」が発足しました。代表代行として富山大学教授の竹内 章氏が就任しました。今年の 3 月末に申請書を提出、その後のプレゼンテーション、7 月末に行われた現地審査を経て 8 月 28 日の認定会議で確定しました。

立山黒部ジオパーク組織の特徴ですが、他のジオパークでは主体となっているのがその地域の行政機関であるのに対して、初めての民間主導の体制を取っています。今回同じく認定を受けた熊

野・南紀のジオパークでは代表が和歌山県知事で、運営の費用負担と事務組織の強さがあります。しかし、公の支援は絶対必要なので、立山黒部ジオパークでは推進協議会の他に関係する東部9市町村からなる支援団体会議が作られ、側面からの支援が得られるようになりました。県も若干の補助を出しています。大地の変動の過程に思いを向け、平野の形成から社会の形成、歴史に至る幅広い内容を理解するのは難しいかもしれませんが、調査・研究はもちろん、楽しく学ぼうという姿勢で良いのかと思います。(川田邦夫 記)

## 8月例会・懇親会

8月11日(月)18時からCic3F「とやま交流館」学習室5号室において、富山支部会員19名が参加して8月例会が行われた。まず山田支部長の挨拶があり、引き続き平成24年から行われている「東北山行」について、その内容がスライド映写された。冒頭、東北地方への山行は東日本大震災を発端として始められたこと、平成24年は岩手支部の支部長をはじめ会員の方々との有意義な交流がなされたことが山田支部長から紹介された。スライドの説明者は以下の通りであった。

平成24年「早池峰山・姫神山山行、宮沢賢治記念館見学他」山田支部長

平成25年「八幡平・岩手山・鞍掛山山行、小岩井農場見学」金尾会員

平成26年「森吉山山行(個人山行)」渋谷副支部長

例会後は、高志会館(ビアガーデン)に場所を移し、懇親会(暑気払い)を行った。

<参加者>

山田、木戸、石浦、近藤、川田、渋谷、永山、高塚、森、松本、辻、鍛冶、本郷、山岸、佐藤、金尾、有澤、河合、櫻井 以上 (金尾誠一 記)

## 『日本三百名山登山ガイド』の出版

各支部会員が分担執筆した日本山岳会編『新版日本三百名山登山ガイド』上中下巻の3冊が山と溪谷社から7月31日に同時発行された。B5版オールカラーで199~223頁、定価はいずれも2300円+税。富山支部会員の担当部分は以下のとおりです。

中巻 朝日岳・雪倉岳・白馬岳(渋谷茂)、毛勝山(佐伯郁夫)、劔岳(佐伯郁夫)、立山(渋谷茂)、奥大日岳(渋谷茂)、鍬崎山(永山義春)、薬師岳(村上清光)、烏帽子岳・野口五郎岳・水晶岳・赤牛岳(金尾誠一)、黒部五郎岳・三俣蓮華岳(永山義春)

下巻 白木峰(本郷潤一)、金剛堂山(山田信明)、人形山(近藤晋)

## 『富山の百山』の出版

富山県山岳連盟が創立65周年記念事業の一環で昨年6月に選定した「富山の百山」のガイドブックが、北日本新聞社創刊130年記念として同社から富山県山岳連盟編『富山の百山』として8月11日に発行された。A5版オールカラー259頁、定価は2500円+税。

富山支部会員の担当部分は以下のとおりです。

金尾誠一：水晶岳・赤牛岳、烏帽子岳・野口五郎岳 佐伯郁夫：猫又山

渋谷 茂：立山、別山、朝日岳・雪倉岳、稲葉山 山田信明：高頭山、

永山義春：薬師岳、北ノ俣岳・黒部五郎岳・三俣蓮華岳、鍬崎山 西川雄策：袴腰山

富山百山委員長：○山田信明、百山委員：○松本睦男、○佐伯郁夫、渋谷 茂、中島 眞、

○森田裕子(○は編集委員兼務)。カバー写真には佐伯会員撮影の劔岳と立山が使われています。

## 新入会員の一言

### 【野崎裕一】平成 26 年 5 月 29 日入会 会員番号 15565

今年の山行は、8月上旬の御嶽山でした。9月下旬に突然の噴火があり、死者 57 名の大惨事がありました。登山は、いつも危険と隣り合わせだと思いつくづく思い出しています。最初の危険な登山は、短大生時代に劔岳の早月尾根を登っていたときでした。昭和 44 年夏の集中豪雨に逢い、キャンプ場が流され馬場島荘へ逃げ込みました。帰る道路や橋の所々が、寸断しているので、山を越え、川を渡り上市の駅まで歩いて帰ったことがあります。今後は、前期高齢者として安全で楽しい登山に励みたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

### 【櫻井奈緒子】平成 26 年 5 月 29 日入会 会員番号 15570

「走るのと登るの、どっちか選べと言われたらどっち選ぶ？」先日、一緒に山登りを終えた友人に反省会と称した飲み会で聞かれ、「登る」と答えた私。「走る」も「登る」もほぼ同時期、5 年ほど前から始めました。「登る」は友人に誘われたのがきっかけで、まさか、天気が良ければどこかに登らないともったいない、と感じるほど好きになるとは思っていませんでした。よく「山登りはどこがいいの」と聞かれますが、まだうまく言葉で言えません。どこか、なぜか魅かれる、といった感じです。スキーやクライミング、また沢登りもといろいろと楽しむ気持ちは十分なのですが、始めたばかりでまったく手探り状態。このたび、日本山岳会に入会させていただき、ぜひ、皆様の豊富な知識や経験に触れさせていただければ、と思っております。今後の活動にご一緒させていただけるのを楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

## 編集後記

今年は日本山岳会の京都・滋賀支部、岐阜支部、福井支部、石川支部、富山支部の五支部合同山行が富山支部の当番で行われました。例年立山を中心に行っていたが今年は五箇山の人形山にしようということで、準備が行われました。少し厳しいかもしれないので、少し楽な所までの班を作りました。五箇山荘での宿泊も含めて喜んで頂けたのは関係者の喜ぶところでした。

8 月 28 日には立山黒部ジオパークが日本ジオパークに認定され、立山で確認された氷河の話題もジオポイントとして注目されますが、一部はある程度の登山経験のある人でなくては見に行けないことがネックになります。ガイドを必要とするジオポイントも今後考えることになると思います。山岳会の方々にも協力が求められるかもしれません。

また、夏の終わり頃には『日本三百名山ガイド』や『富山の百山』が出版され、後者の売れ行きも良い状況と聞いています。一般の山岳愛好者が増え、安全で楽しい山行が普及することを願っています。関係者の皆様、ご苦労様でした。 (編集委員長 川田邦夫 記)

公益社団法人日本山岳会 富山支部会報 第 97 号

発行者：山田信明 編集者：川田邦夫

事務局 〒939-8095 富山市大泉中町 7-52-204 河合義則方

電話 076-492-3936 , 090-4326-6197 Eメール [kawa-mori55@air.ocn.ne.jp](mailto:kawa-mori55@air.ocn.ne.jp)